

# 福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行  
財団法人第五福竜丸平和協会  
〒136 東京都江東区  
夢の島3-2  
都立第五福竜丸展示館内  
電話 03-3521-8494

アメリカはこの夏ネヴァダの核実験場で未臨界核実験を行なったが、近く第二回の実験を実施する予定と伝えられている。もともとアメリカは一九九六会計年度に二回、九七年度に四回の実験を行うことを予定していた。しかし未臨界核実験に対する国際的批判は強く、国連におけるCTBT討議などへの影響を考慮して、ほぼ一年間その実施を延期していたものである。したがって来年度にはさらに数回の実験が行なわれるおそれもある。

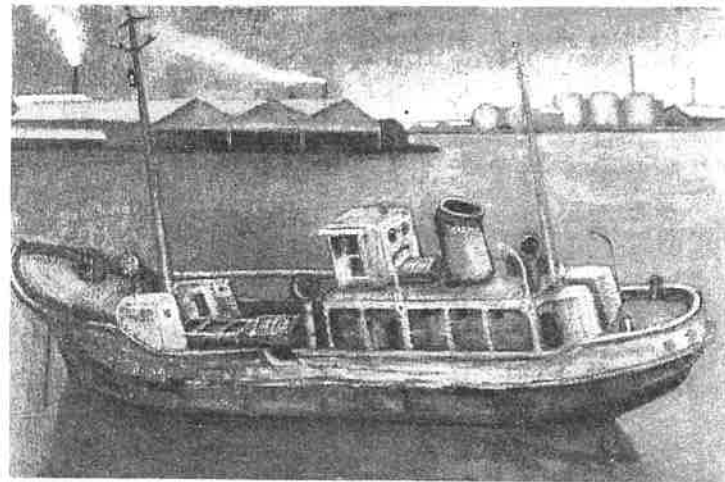
## アメリカの未臨界核実験

山田 英二

アメリカはこの夏ネヴァダの核実験場で未臨界核実験を行なったが、近く第二回の実験を実施する予定と伝えられている。もともとアメリカは一九九六会計年度に二回、九七年度に四回の実験を行うことを予定していた。しかし未臨界核実験に対する国際的批判は強く、国連におけるCTBT討議などへの影響を考慮して、ほぼ一年間その実施を延期していたものである。したがって来年度にはさらに数回の実験が行なわれるおそれもある。

その運搬手段の開発の場合には核実験とは無関係に行なわれ得ることも指摘しておく必要がある。今回の未臨界核実験にはほかに問題がある。これらの実験ではたかだか数十キログラム程度の高性能爆薬を用いることになっていくに過ぎない。核反応からのエネルギーは爆薬の爆発に比べて無視できる程度だから実験は地上でも実施可能な筈である。それにも関わらず今回の実験はネヴァダの核実験施設を利用して行なわれる。既存の施設を利用するほうが安上がりだという説明がなされているが、実は核実験が中止されてから数年たつ現在でもネヴァダの施設は何時でも使用可能な状態に保たれており、そのためにアメリカ政府は莫大な人的、財政的負担を投入しているのである。未臨界核実験の為に必要とされる追加分はそれほど多くないというわけである。ここにもアメリカの核兵器開発能力維持の意図が表われていると言えるであろう。

(金沢大学名誉教授・協会評議員)



「廃船第五福竜丸」(1970年頃) M30 川上貫一

## 築地にまぐる塚を

築地の魚市場に「まぐる塚」を作り第五福竜丸の被災、「原爆まぐる」を後世に残し、核兵器廃絶の願いをひろげたいと、第五福竜丸乗組員大石又七さんのよびかけでこのほど署名と募金活動がはじまりました。築地魚市場の正門入

口近くに高さ90cm位の自然石に「まぐる塚」と彫り込んだだけのモニュメントを作ろうというもので募金目標も三百万円。一人でも多くの人々に参加してもらいたいとあえて「十円募金」を提唱。運動を支援する「築地にまぐる塚を作る会」の手で、訴えと署名用紙が用意され、輪が広がっています。

## 展示館で「川上貫一展」開く

八月、展示館で「川上貫一展―廃船第五福竜丸」がひらかれました。江東区深川に住み、下町の人物・風景を愛し、町工場や木場、埋立地などを描いた画家川上貫一さんは、一九七〇年頃夢の島の廃船第五福竜丸を「画家としてどうしても描き残さねば」と30号近い油絵四作を描きました。八五年八月、65歳で急逝しましたが、のち、照子夫人からその作品が展示館に寄贈されました。展示館の二階の真ん中に

## 反核平和マラソン出発

船体に相対するよう四枚の連作のみが展示され、静かに原水爆のない未来への航海を訴えました。



反核平和マラソン展示館前出発

八月はじめ、新日本スポーツ連盟などがよびかけた「97反核平和マラソン」(東京―横浜―芦ノ湖)が展示館前からスタート。核兵器廃絶のゼッケンを胸に、沿道にはこやかに手をふり、「区間5、10キロ」「第五福竜丸の全速力より少し遅い平均速度」で全15区間、二百名近いランナーで走り継ぎました。体調がいまいちで、数区間と想っていたがフルマラソンに匹敵する夢の島―横浜市役所間を走ってしまったという深谷市のYさんは「展示館前のスタートは意義深いものがあつた。はじめて中に入ったが涙が出てきてしまった。あれで気合いがはいった」とアンケートに記しました。

(三面よりつづく)

で、ほとんどの人がC型ウイルスに感染しています。そのことが最近になって明らかになりました。被爆に関係があるのです。関係があるから、科学技術庁は今でも国の予算を使って、健康診断と言ふ名目で乗組員たちの資料を取り続けています。この資料は、世界的にも医学的にも大事な資料なのです。しかし、発病しても治療はしないというのだから、これもひどい話です。

私たちの被爆、そして不本意な貴方がたの死はなんだったのか。加害者の責任はこれでよいのか。改めて基本に立ちもどり、問い直す必要があると私は思っています。皆さんの犠牲は決して無駄にはいたしません。命の続くかぎり頑張ることを誓います。同じ境遇にありながら、さいわいにも生きのびている私たちにくらべ、ご遺族となられたご家族のご苦労ご心痛を思うとき、私は黙っていられたくなるのです。死んでいった仲間十一人とおやじさん、この次は良いいご報告ができますよう、遠く黄泉の国から見守っていて下さい。平成九年六月三十日 大石又七 (元第五福竜丸乗組員)

語り継ぎたい

「よみがえった第五福竜丸」

望月 新三郎

故久保山愛吉さんを偲んで、九月二十三日「第五福竜丸で平和を語る」と銘うっての集いがおこなわれて、今年で六回目を迎える。堀田貴美さん、中村 博氏から声をかけられ、私は初回から、語り、紙芝居、ペープサートなどで、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを語り、演じてきた。

ふり返ってみて思うのは、第五福竜丸に関して、きちんと位置づけて語ってこなかったことだ。

平和を語るということは、そのテーマは中広くあってよいのであろうが……。そんな、ある日、堀田さんが、

「第五福竜丸が、この展示館に保存されるまでのいきさつ、歴史を語ってこなかったわね、このままでは、風化してしまわないかしら」と話された。そうだった。語り継いでいくということは、水爆実験による放射能の被曝だけでなく、この場所に第五福竜丸が保存

されるには、実に沢山の人の協力が、つまり、保存運動があったこと、ねばり強い歩みがあったからこそ、今に保存が実現したのでないか、このことを知らせる語りがあったこそ第五福竜丸の語りの意義を深めることだと悟った。さっそく、堀田さんを介して、保存運動のよき協力者のひとり、根岸泉さんにお逢いし、お話を聞くことになった。

いろいろ伺っているうち、第十四号埋め立地(現・夢の島公園)や、川並を歩いていた嶋田てつ助さんのイメージがうかび上がってきた。嶋田さんは倅の和彦さんと第五福竜丸のペンキを塗ってくれただけでなく、毎日のように、「船を沈めちゃならねえ」と、水をかい出してくれた人で、九十歳で死ぬ三日前に、車椅子に座って第五福竜丸にお別れにきたとき

「水爆のおそろしさは、あのマグロ船を見ればわかる。永久保存し

て子どもたちに見せなくては……」と語っていたという。

なんと、嶋田てつ助さんの江戸っ子気質というか、一徹の心根で第五福竜丸にふれ、「何か、水爆をうけて沈みそうなんだ。とにかく沈めてはなんねえ」と云ったことばが、心にひしひしと追ってくるようであった。もし、あの時、第五福竜丸の水をかい出し、錆をおとし、ペンキを塗り、保存をよびかける人がいなかったら、今日の保存はあり得なかったことだろう。

当時の東京新聞の見出しだけひらいてみても、その頃の様子がうかがえてくる。

一九七一年(昭和四十六年)十一月十七日付「手弁当でペンキ塗り」「被爆の証人 第五福竜丸」「江戸っ子が名乗り」「江戸っ子の嶋田さん父子、水爆の恐ろしさを永久に」

私は、子どもたちに呼びかける形式で「よみがえった第五福竜丸」を書いてみた。画家がコマコマ画で描くように、イメージを重ね合せながら。

あっしは、嶋田てつ助って

いうんだ。

よろしくな。この船はよ。大事な船なんだ。はやぶさ丸って名前までかえられちゃって、今より、もっともっとぼろぼろにされて船の墓場に捨てられていたんだ。

そうよ、船の墓場さあ、今でこそ、夢の島なんていわれて、草花も樹も生えているがよ、あの頃は第十四号埋め立地といわれていたゴミの山よ。船もいっぺー捨てられていたんだ。

ハエもいっぺーいた。近くの住宅でよ、皿にトーフをだしておこうものなら、真っ黒くなって見えなくなっちゃった。うそみていだが、ひどい所だった。

あれは、あっしが、六十九歳のときよ、長いことやってた川並をやめて、倅のところまでペンキ塗りの手伝いをしていたんだ。川並といっても解からねえだろうな。家の材木になる丸太を運んだり、管理するいかだ師のことさ。……

私は、語り込んでいきながらいつか紙芝居にしていきたいと思っている。(作家)

仲間たちへの合同慰霊祭

大石 又七

間もなく四十三年目の久保山愛吉氏の命日、九月二十三日を迎える。局長の死後、この間十人の仲間が亡くなった。この一年ほどだけでも三人もの仲間が亡くなり、二十三人の乗組員のうち、すでに半数に近い十一人が戒名をもつ身となつている。

私は、局長はじめ十一人の仲間のことをひとときも忘れたことはない。仲間たちへの「合同慰霊祭」を元乗組員たちだけの手でおこないたい——私のかねてからの念願が、この六月末、やっと実現した。九月二十三日を前に、あらためてその慰霊祭を思い、当日の私の弔辞を記して、仲間たちを偲ぶたい。合同慰霊祭は、六月三十日、焼津市内の光心寺でしめやかに執り行われた。

梅雨というのに真夏を思わせるような、じりじりと照りつける中、九州、名古屋、清水、東京と、遠くから集まった仲間たちは思った

より元氣な足取りで安心した。

参加されたご遺族、されなかつたご遺族も、この私たちの計画に快くご理解下さり、行うことができたことが何より嬉しかった。心の奥に持っていた、それぞれの複雑な思いが、形をもつて一つの区切りを付けることができたように思う。

地元の焼津で、この慰霊祭のすべてを取り纏めて下さった池田正穂さん本当に有り難うございました。なお、それにも増して西川船主ご夫妻の大きなお力添えもいただけ、予想外の立派な法事になったことを心から感謝致しています。死者たちへの思い、そして生き残っているものたちが、やらなければならぬ、せめてもの償い、と自分なりに言いかせながら東京に帰りました。

甲 辞 久保山愛吉さん、川島正義さん、

増田三三郎さん、鈴木鎮三さん、増田祐一さん、山本忠司さん、鈴木 隆さん、高木兼重さん、久保山志郎さん、服部竹治さん、安藤三郎さん、そして西川のおやじさん、懐かしい焼津の町で、皆さんとそろって集まることができました。お懐かしゅうございます。もっと早く、何度もお会いしたかったです。遅くなって本当に申し訳ありません。

この集まりが船主西川角市さんを囲んで、元乗組員皆で話あえる場だったら、どんなに良かっただろうか、そう思うと、とても残念です。

ひょうきんで何時も皆を笑わせていた祐ちゃん。そちらの仲間も十一人になりましたね。局長や機関長に可愛がられていますか。時々そんなことも思ったりします。

第五福竜丸事件は、日本の、否、世界の平和運動に大きな貢献をしました。そして核兵器反対運動の原点を作りました。それだけではありません。日本政府は、対米外交の上でも、このビキニ事件の賠償問題をうまく利用して、わずかな見舞金と引き替えに、念願のアメリカからの原子炉や、原子力技

術を導入しました。そうした貢献の上に、皆さんの犠牲は立っているのに、どうしてむくわれないのでしょうか。

広島・長崎の被爆者の死は、戦争中の出来事にも拘らず、五二年たった今でも、国や市が公の手で手厚く葬っています。同じ被爆者でも大変な違いです。私たち第五福竜丸の乗組員も、広島原爆の、爆心地から八〇〇メートル地点で被爆した人たちと同じ量の放射線を浴びているのに、政治決着前に亡くなった久保山さんを除いて、後の一〇人は被爆とは関係ないとして認めていません。それどころか、生活態度が悪かった、酒の飲みすぎではなどと陰ではそんなひどいことを言うのです。

ビキニ事件が起こった当時、反米感情の悪化に驚いた日本政府は、あわてて事件をその年のうちに政治決着しました。そのため、後に残されて苦しむ被爆者や、皆さんのように後遺症で亡くなつても、事件はもう決着済み、被爆とは関係ない、と言わざるをえないのです。そして事件にふたをしているのです。

私たちに肝臓障害の多いのは、当時の輸血が原因(四面へつづく)